

(個別研修) 田中邦子

研修テーマ : 障害者と仕事について

1. 障害者支援施設における職業リハビリテーションを学ぶ
2. 企業における障害者雇用の工夫を学ぶ
3. 1.2.におけるアメリカとデンマークそれぞれの取り組みを比較する

研修地 : アメリカ オハイオ州シンシナティ

研修日 : 5月8日～5月11日

① Skyward Academy 訪問

発達障害の子どものための教育機関として、2001年にオハイオ州の認可を得て創立された私立の中・高校一貫校。

卒業後の4年間は移行期間として福祉サービスに変わり、自律・就労準備の訓練をする。

最長で22歳まで在籍できる。

郊外の静かなエリアで、教会に隣接している。生徒数は全学年合わせて80名弱。



● 校長のMelissa Amreinと面談

公立の学校では受けられない、細かいケアと個別の特性を活かす教育をとの方針で設立された学校。生徒それぞれの特性を活かす指導をしている。

学年や年齢ではなく、特性別のクラス編成。

生徒10人に対して先生2人。

一般的な教科よりも、実際的な内容の指導を多く実施している。

例えば雨がふるとどうなるか？太陽光で料理はできるか？車が欲しいならどうする？など。

授業も講義方式ではなく対話方式をとり、コミュニケーション力の養成に力を入れている。

職業訓練としては日本の就労移行と同じように、作業の訓練やビジネスマナー、履歴書の書き方などを指導している。

近隣のお店やレストランでの職場体験もあり。

自立訓練では身だしなみの整え方、ベッドメイクや料理、買い物など。

お金の管理はここでも大事な内容であるが、最近はキャッシュレス社会であるのが難点とのこと。



席から離れて歩き回っている子もいれば、
ずっと目を閉じて黙っている子もいる



協力してレゴで何かを製作中



ICTの活用も盛んに実施。

②GCBHS(Greater Cincinnati Behavioral Health Services)

オハイオ州最大の精神保健福祉センター

- ・ 就労支援部門のマネージャー Jarred Murphy とZoomで面談。

利用者との関わりは、インテーク、アセスメント、プランニング、インターベンション、モニタリング、ターミネーションの順番で展開していくという点では日本と同じであるようだった。

職業準備性の確認について、客観的な評価基準ではなく、面談やカウンセリングを通して評価していくという。

よりキメの細かいIPS(援助付き雇用)が求められている点についても日本と同様である様子。

ピアサポート活動については、野球大会やランニングイベント、美術館巡り、カラオケ、朝食会、ランチミーティングなど、就労移行事業所と協力して実施しているそう。

③RCHC(Recovery Center of Hamilton County) 訪問

オハイオ州ハミルトン郡立の精神保健福祉事業所。

就労移行事業所と地域活動支援センターが合体したような形態。



ヨガのクラス



アートセラピーのクラス



フィットネス施設もあり

群立の施設であるため、地元の野球チーム・シンシナティレッズが勝つごとに幾らかの寄付が入る仕組みがあるとのこと。

ソーシャルワーカーDavid Belgade の話によると、アメリカの大部分の州と同様にオハイオ州でも精神障害者支援のための予算は発達障害者支援のための予算に比べて3分の1ほど。脱入院化以降、行き場のない精神障害者は病院と保健所と施設を何度も行き来し、家族の負担が軽減することはない、とのことであった。